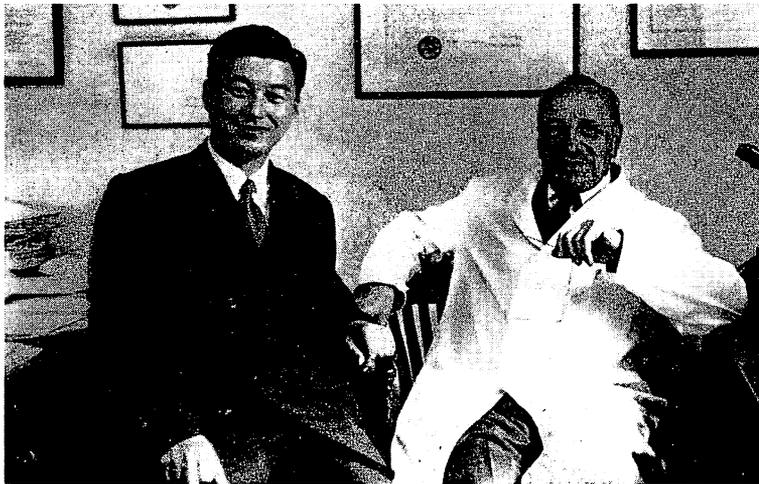


細胞診指導医会 会報

No. 10 Oct. 1993



日本臨床細胞学会名誉会長 増淵一正先生追悼号



若き日の増淵一正先生と Dr. Papanicolaou

はじめに

1992年11月14日* に本学会名誉会長増淵一正先生はお亡くなりになりました。先生の追悼の辞は、癌研婦人科部長荷見勝彦先生により、本学会誌32巻3号に正式に掲載されています。

先生は本学会の創立者の一人であり、また指導医制度を立案され実行された方でもありますので、本誌においても改めて先生を偲び、追悼号を発刊することにしました。

* 本誌9号の第一頁に「1月23日」と誤まって記載されています。慎しんで訂正させて戴きます。

この特集号を編集するに当たって、編集者として特に執筆者にお願いしたことがあります。なるべく多くの指導医の先生に、それぞれの視野に立って、先生の姿をきわめて個人的に描いて頂きながら追悼して頂きたいということです。その理由は、この追悼号を読まれた方々自身が、それぞれに区切られた先生の断面像を組み合わせることにより、“増淵一正の人間像”をホログラフィーのような立体的な影像として思い浮べて頂きたいと思ったからです。

ご存知のごとく、先生は一生を細胞診の発展に尽力された方でもあります。一生を通じての仕事は、先生が遺された奨励賞の名称に如実に表現されています。

「Kazumasa Masubuchi Lifetime Achievement Award in Diagnostic Cytology」という名称です。

まさに山のように積みあげられた先生の業績の全体を凝集させた表現だと思えます。

けれど先生はわが国での細胞診を創始された方ではありません。その仕事は水野潤二先生を始めとして多くの先生方の協力を得ることによりなされたものと思えます。増淵先生の以前にも多くの人々が細胞診を試みたという記録は少なからず残っています。しかし、それらは限られた教室内での研究であったり、また狭い地域での実際の業務であったと思えます。

それらの成果と先生の業績は一線を画するものであり、わが国の細胞診を個人の仕事に留めず、広い視野から、その基礎的研究と実際の業務を組織化した点はほかに類をみないと思えます。もちろんこの細胞診を自らの臨床にいち早く応用し、多くの患者の癌を早期に発見したこと、また多くの弟子を立派に育てあげ、さらにスク

リーナーの養成にも尽力されたことも知らない人はいないと思います。先生とそれ以前の人々との違いは、Dr. Papanicolaou や Dr. Babes とそれ以前の人々との仕事の差に類似するものがあります。その意味では先生は常にわが国の細胞診の第一人者であったと思えます。

それはマラソンにたとえるならば、常に先頭集団に在り、さらにその中でトップを走るために受ける強い風圧に耐えながら走り続けた方だと思っています。しかも棄権することなく、42.195 km を駆け抜け、胸には金メダルをそして頭には月桂冠を戴いて、静かに立ち去るマラソン選手のイメージに似た感慨が、今日現在沸々と湧きあがってきます。

先生！ 長い間ご指導を戴き有難う存じました。そして本当にご苦労さまでした。どうか安らかにお眠り下さい。

合 掌

(編集委員長 山田 喬 記)



増淵一正先生との出会い



佐々木研究所附属杏雲堂病院

天神美夫

昭和24年9月、初めて増淵一正先生にお目にかかった。当時私はインターンを終り、5月に医師国家試験が終わり、7月に合格発表があった。さて医師としてどのような方向に進もうかと思案していた。私の父は東京大学伝染病研究所（現在の医科研）から厚生省予防衛生研究所に移ったばかりであったが、国家試験発表前伝研の病理で実験の手伝いをしていたこともあって、病理学をやりたいようであった。

しかし私はマイクロームをとぎ、病理標本を作り染色し顕微鏡をみることにはあきたらず、生きている患者に接する臨床医になりたかった。そこで父に相談したところ癌研病院ではどうかということになり、古くからの父の友人である中原和郎先生（当時癌研研究所長）のところへ伺った。

中原先生は私の希望をきき、田崎勇三先生（当時病院長）に紹介して下さることになる。田崎先生の前に直立不動の姿勢で立つと「君は何をやりたいんだ」とおっしゃる。私は深く考えもせず癌関係の医師であれば良い程度の認識しかなかったが、とっさに「胃癌の手術ができるような医師になりたい」といってしまった。先生はしばらく考えていたが、「今外科は満席であいていない。婦人科ではどうか」とおっしゃる。

私が考えてもいないことなので仏頂面をしていると、「手術をやりたいのなら婦人科だって手術をやるんだ。今月から東大より増淵君が婦人科部長で赴任してくる。まだ席があいているようだからとりあえず婦人科に入っている」といわれる。きわめて大ざっぱである。私はそれにつられてつい「はい」といってしまった。これが私の婦人科医としてのスタートであり、また増淵先生との出会いともなった。

増淵先生が婦人科部長として着任した日、病院長より紹介された。先生はなかなかの美男子で初対面の私を冷

い目でちらっと眺めたのが印象的であった。院長よりことの経緯をきいていたと思われる。医局員は2人で、1人は室岡一先生（後に日本医大教授）、あとは私であった。当時の癌研は京橋の南胃腸病院を買ってはじめられていた。婦人科の外来は6畳一間位に検診台2台、それに6人部屋の病室一つというきわめて小世帯であり、現在の癌研からみると隔世の感がある。

それでも診療が始まった。増淵先生は大変張り切っておられ、今の子宮癌患者は手術しても死亡してしまうケースが多いが、それは早期診断ができないためであり、肉眼ではわからないような時期に発見することができれば、治癒率は必ず向上する。手術の上手な医師を育成するには10年以上かかるが、I期癌でみつめることができれば全体的には治る患者が多くなるはずだ、と熱っぽく話されていたことを今でも思い出すことができる（当時は0期という概念はなかった）。

それから約1年半が経った。ある日院長によべれた。院長室に入ると田崎先生が「外科の席が1人あいたが、君は外科に行くかね」といわれる。初対面での約束をおぼえておられた。私がおのとき「はい」と答えれば私は一生外科医であったはずであるが、反射的に「婦人科で結構です。婦人科もおもしろい」といってしまった。これが第二の婦人科医の出発でもあった。

増淵先生は急にニコニコされ、「天神君、米国で始まった Cytology という子宮癌の診断法があるが、日本ではまだ研究している学者がほとんどいない。この研究をぜひ開始してみたまえ」といわれた。これが私と細胞診との出会いであり、私が今日でもそれに関連する研究を行うこととなったスタートでもあった。増淵先生の早期診断に対する情熱と学問的先見性に対し尊敬の念を禁じ得ない。

私の思い出の中での増淵一正先生



大阪警察病院名誉院長
滝 一郎

本年6月、増淵一正先生を偲んで何か書くようにとのご依頼があった。簡単にお引受けしたものの、先生は日本臨床細胞学会の創設者であり、IACの重鎮でもあられた方で、そのご業績についてはすでに詳細に記録され、しばしば語られていて、大変書き辛いことが分かった。しかし、一旦お引受けしたのを断るわけには行かないので、私の思い出の中の増淵先生について断片的に述べたい。思い出はすべて昔物語であるし、いささか私事にわたるのをご寛容頂きたい。

増淵一正先生は昭和24年、1949年に、癌研付属病院の初代婦人科部長に就任され、本格的に子宮頸癌の診断と治療に取り組まれたとのことである。私が増淵先生に初めてお目にかかったのは、昭和34年、1959年、石川正臣会長が主催された第11回日本産科婦人科学会総会で、「子宮頸癌の早期診断に関する研究」と題する宿題報告を発表されたときである。私は大いなる期待を抱き、演壇に近い席で講演を拝聴した。宿題報告の立派な研究内容、自信に溢れた白皙の顔貌と気迫の籠った演説に深い感銘を受けたのを、34年後の今日でもありありと思い出することができる。このとき以来、増淵先生は尊敬する先輩として私の脳裏を離れなかった。私がこの宿題報告にきわめて強い関心を抱いていた理由は、その当時、子宮頸部上皮内癌が今後ともに臨床研究の最大目標であると考えていたからである。

私がそう考えるにいたった経緯について述べると、昭和20年、1945年11月、海軍軍医としての最前線勤務を終え、九死に一生を得て大阪へ帰還したものの、父の医院も居宅も戦災で焼失、父母は山陰へ疎開しているというような、途方に暮れる状況におかれたが、やっと立直って、阪大医学部第1病理学教室で毎日勤務するようになったのが、昭和22年、1947年の春頃である。父も老齢ながら産婦人科医院を再開した。この父も第1病理学教室、木下良順教授指導下での研究経歴があり、煙草タールによる発癌実験に成功し、世界で初めてのものと喜んでいた。私もこのような機縁で、昭和16年、1941年12月

の繰り上げ卒業直後に病理学教室に入籍したのであるが、太平洋戦争に従軍するはめとなり、実際に病理学教室勤務を始めたのは、それから4年余りも後のことになった。病理学教室在籍中には、アゾ色素による実験的肝癌、吉田肉腫の研究などにたずさわった。昭和29年、1954年、新任の宮地徹教授が、日本病理学会西部地方部会において、肺癌の病理組織に関する特別講演を担当されることになり、肺癌の剖検材料を全国的に収集して一括検討するという機会に恵まれた。私は、その頃から肺癌の初期像、上皮内癌に関する文献が現れているのを知っていたので、収集材料の中からそのような記載に該当する組織像を見付け出そうと、熱心に鏡検した。やっと、気管支粘膜の扁平上皮内癌像をみつけ、得意になって癌学会で発表した。当時は慶応大学医学部外科に在籍中で、後年に癌センター総長になられた故石川七郎先生が私の発表に大変興味を抱いて、私に話かけられたのがご縁となり、その後永年にわたり文通することになった。私は、発癌実験やこの経験を通じて、癌は初期に発見して対処しなくてはならないと確信するようになっていた。その後間もなく、私は9年余り在籍した病理学教室を離れ、昭和30年、1955年、産婦人科学教室に移籍することになったが、その前に、過去数年間に発表された産婦人科腫瘍に関する文献の収集、整理を行い、婦人科での第一目標は上皮内癌であると定めていた。その頃、上皮内癌の概念は、日本病理学会でもまだ定着していなかった。私が増淵先生の宿題報告に非常な関心を抱いたことがお分かり頂けると思う。肺癌の早期発見は今でも難しいことのひとつで、その初期組織像に関する報告も少ない。

増淵先生は、宿題報告を済まされた後、子宮癌の早期発見、治療を目標として、コルポスコピー、細胞診の導入とその普及に本腰を入れて努力され、婦人科細胞学談話会の設立に始まり、昭和36年、1961年の日本臨床細胞学会創立に至る主導者となり、東京で第1回日本臨床細胞学会総会開催を故水野潤二教授とともに担当されたの

は周知のことである。増淵先生と協力して細胞診の指導と普及に当たられた水野先生は、昭和35年、1960年に関西医大教授として着任され、昭和36年、東京に引き続き、大阪で第2回総会を増淵先生とともに担当し開催された。水野先生は、当時の阪大産婦人科主任、故足高善雄教授を再三訪問され、コルポスコピーと細胞診を導入して担当していた私は、教授室に呼ばれて水野教授にお目にかかり、お話を伺う機会が何度かあったのを思い出す。この両先生のご活躍の経過は、昭和54年、1979年の第20回臨床細胞学会総会における増淵先生ご自身の記念講演（学会誌18巻3号に掲載）で述べられている。両先生は大変お仲が良かったと私は推察している。また、両先生とも、私を大事にして下されたことを実感している。両先生ともにお亡くなりになってしまっ、誠に寂しくなった。

増淵先生の側近におられた方々が、私よりも先生のことをより良く、より多く知っておられると思うのに、なぜ私にお鉢が回ってきたのか、依頼があったとき、咄嗟に質問すべきことであったのに、ここまで増淵先生のことを思い出しながら書いてから、このような疑問が沸いてくるのも、私の頭の巡りが悪いせいだったと気がつき、やりきれない思いになった。途中で投げ出すつもりでいたら、側近の方々も書かれるということなので、記述に誤りがあってはならないし、さらに荷が重くなったように感じたが、書きつづけることにした。私の記憶に残る増淵先生は、いつも確信を抱いてまっしぐらに突進し、決して弱音を吐かない方であった。私はこうしなさいというようなことを先生からいわれたことはなかったが、私の疑問に対しては、こうすれば良い、そのような心配は要らないというふうに、迅速に明確で簡潔な答えが返ってくるのが常であった。私は実にさっぱりした気分になれた。何度か拝見した先生の子宮癌根治手術も誠に見事なもので、先生のご性格を反映するかのようによかった。

私が九大に奉職していたとき、九大の医師を癌研病院へ寄越してくれないかのご依頼を受け、教室員の勧誘をしばしば試みたことがある。その当時は、誰もが、東京に長期滞在することに難色を示し、私の在任中に先生のご期待に添えなかったのを、今でも残念に思っている。もうひとつ、これは時効が発生しているので書いても良いと思うが、増淵先生から電話があり、日本癌治療学会の会長を引受けないかということ我突然にいただされ

て驚いたことがある。即答はできないので考えさせて頂きたいと返事をした。そのときの情勢では、昭和52年、1977年、九大で同僚の第2外科、井口 潔教授が同学会を福岡で主催し、私も昭和53年、1978年に日本産科婦人科学会を福岡で主催した後間もないことであるし、ちょっと難しいのではないかと思い、野田起一郎教授に電話して、増淵先生がこういうことをいわれているが、増淵先生が担当されるのが順序ではないかと申したことがある。私は、増淵先生の担当される国際細胞学会の行事予定が重なったのが理由であろうと思った。その通りであったようであるが、結局は増淵先生が癌治療学会を引き受ける決心をされてほっとした。このような折衝の間に、故森山 豊先生から、日本母性衛生学会を福岡で開催して欲しいとの申し出があり、ことは重なるものと二度びっくりしたものの、私は増淵先生からこういう申し出を受けているからとお断りできた。私は教室員や同窓会に負担をかけないで済んだことになり、今から考えると、これは増淵先生のおかげであると思う。

私が意外に思ったことのひとつに増淵先生が邦楽を好まれていたことがある。何かの機会にこのことをお聞きしてから、私が習っている長唄のことについて語り合うことが幾度かあって、先生の邦楽に関する知識の広いのに関心していた。私に唄って聞かせろといわれるのでやってみたことがあるが、後で汗顔の思いをしたものである。とにかく、増淵先生に対しては、行くところ可ならざるなしとの印象を受けた。先生は古希を過ぎても嬰鑠としておられ、ホームクラブ、霞ヶ関で良いスコアが出たことなどを、折りにふれ嬉しそうに話されていた。先生は煙草が大嫌い、少しの匂いでも咳こまれるのをお気の毒に思ったことが何度もあった。これと全く関係がないでもないが、自分は長生きできるだろうかというような疑問をふと私に漏らされたことがあった。私はすぐに、心配ありませんよ、大丈夫ですとお答えしたが、増淵先生にもこういう一面があるのかと、ほほえましく思ったし、先生との親近感が深まるのを覚えた。先生がご不快ということを知った時は、さすがの先生もやられなさったかと遺憾に思ったが、病に屈することなく、診療をつづけられたことを伝え聞いて、先生の本領が最後まで失われなかったことに改めて敬服した次第である。

勝手気儘なことを書いて、霊界の先生や読者からお小言を頂戴するのではなからうかと思うが、お許しを願いたいものである。先生のご冥福を心よりお祈りする。



二つの宝

神奈川県立がんセンター婦人科

岡島弘幸

増淵先生の追悼号の原稿をといわれてたくさんの想い出の中から、さて何を書いたものかと多少迷ったが、やはりこの話にしようと思いました。

増淵先生は戦後アメリカ合衆国の国務省から Exchange Visitor として招かれ、1956年2月から約3ヵ月余をアメリカ、その後約2ヵ月、欧州各国を外遊しています。そのときの見聞記が癌の臨床に掲載されて残っているが、「米国での最大の目的は Prof. Papanicolaou に会うことである」とご自分でも書いていらっしゃいます。ここのくだりを少し本文から引用すると、「始めて New York にきたときに彼に会うことは可能だったが、最初に本尊を拜んでしまうと、何かしらもったいないと思ったので、わざわざ、私のアメリカ旅行の最終に訪ねたいと思った」と、その気の入れようがよく解ります。「5月7日、Cornell 大学の解剖学教室の教授室に Prof. Papanicolaou を訪問することができた。一中略— 1954年度出版の Atlas of Exfoliative Cytology をとてもよくできているといって、満足しておられた。近日中に1956年度版の Supplement ができるから送ってあげるといわれた。私が日本に帰ってから、Dr. Papanicolaou の署名入りの Atlas of Exfoliative Cytology を送って下さったので、私の永遠の宝になった。先生自ら、いろいろと標本を出してみせてくれる。私のところで染色している (EA 36 法) のも、案外よく染っていて本家のものと比べて遜色がないので安心した。その旨を話すと、相好をくずして喜んでくれた。始めは哲学者になるつもりだったことから、今日にいたるまでの生涯の歩みを物静かに語ってくれる」と若き増淵先生の呼吸が聞えそうな文章です。

この旅行で増淵先生は、細胞診の実施に当ってアメリカでは Cytotechnologist と Cytopathologist がきわめて重い比重を占めていることを知ってきて、日本でも臨床

細胞学会を一日も早く設立しないと世界に立ち遅れると切実に考えられて、1961年、日本臨床細胞学会を創設、すぐに細胞検査士養成の仕事に着手されて、故水野潤二先生と東西呼応してスクリーナー養成所を開設することになります。1968年のことです。「5月6日月曜日、遂にわが癌研に細胞診スクリーナー養成所ができあがり、開所式が行われた。内装成って第1回生を受け入れた旧癌研3階の部屋を私は自分の子の誕生のように嬉しくみたものである」

先生はこの開所式の6日後、5月12日、Rio de Janeiro で開かれる第3回国際細胞学会へ出発したが、「正直いって私は心身ともに疲れ果てた」と書いていらっしゃいます。創草の頃のご苦労がにじむ文章で頭が下ります。

今、増淵先生がこのような想いで設立された癌研細胞診スクリーナー養成所に宝が二つあります。一つは、あ のとき Dr. Papanicolaou から送られた署名入りの Atlas of Exfoliative Cytology であり、もう一つは、渡米の折持参されて染色の良否を直接問われた、その元になった本、増淵先生が当時焦土と化した東京から米軍座間基地内406部隊図書館に通って、ご自分でタイプ複写された本、“A Handbook for the Diagnosis of Cancer of the Uterus by the Use of Vaginal Smears, 1947, Harvard University Press, by the American Cancer Society” がそれです。

先生のお弟子さんの最後に加えていただいたお陰で、身近にこのような宝に触れさせていただけることを、私は有難く思っています。

参考文献：癌の臨床、第3巻第1号、癌研細胞診スクリーナー養成所20周年記念号



増淵先生の思い出

癌研婦人科

藤本郁野

次の指導医会会報は増淵先生の思い出の特集号にしたので、増淵先生の最後の頃についてのご様子を書いてくださいというご依頼をいただき、ここに書かせていただくことになりました。

増淵先生がご自宅で倒れられ意識不明となり癌研に緊急入院されたという知らせを受けたのは1992年11月11日の夜でした。翌日から第31回日本臨床細胞学会秋期大会が野田 定学術集會会長のもと大阪の宝塚で開催されることとなり11月11日は午後から一部の委員会が開かれており癌研からは山内先生と私が大阪にきておりました。宝塚から梅田にもどり夕食を済ませてホテルに戻ったところ、先生の入院の知らせが私の自宅から届いており、お返し癌研に TEL を入れると、増淵先生が夕食後お風呂場で転倒され意識不明となった由。増淵先生の奥様からの連絡で当直医と内科の担当医の一人でいらっしゃる藤井先生がすぐかけつけ、救急車で癌研へ入院させ、超音波下に腹腔内大量出血と肝破裂の徴候ありとの診断であること。今夜は内科・外科医の討議の結果、輸液や輸血のみの保存的処置のみで経過観察となるであろうということであった。すぐ帰ろうと思ったときにはすでに東京行の最終便はなくなっており、止むなく翌朝一番で帰ることとした。夜中まんじりともできず、これまでのことが走馬燈のように頭の中を駆けめぐった。

増淵先生がご自分で前胸部のしこりに気づかれ、そこから穿刺細胞診をしたところ肝癌の骨転移であるとわかったのは1991年8月でありました。すぐ荷見先生、山内先生そして私が増淵先生の部屋によばれ、今後の対策についてご自分の受けられる治療計画、そして予後について語られ、自分が亡くなった後のことについてまで用意周到に、まるで学会開催の準備でもするかのように細かな手順についてまで話されました。そのとき私たちに「これだけは約束してくれよ」といわれたことがあったのです。それは最期は自宅で迎えたいということでした。私たちは気も転倒し、ただオロオロするだけで「は

いわかりました」と返事するのが精一杯でした。いつかはそのときを迎えなければならないことはわかってはいたものの、もしかしたら……と一縷の希みをたぐさないではいられない気持でした。

明けて12日の朝癌研の516号室に入ると増淵先生は蒼白なお顔で天井の一点をにらんでおられました。その眼光の鋭さにほっとし、「先生おそくなりましたが、ただいま大阪よりもどりました」とおそるおそる声をかけると「ダメじゃないか、あれほどいっておいのに」とお叱りを受けてしまいました。その後肝破裂部からの出血を止めるため Angio 室に運ばれて行き、動脈閉塞術は成功し一時は血圧も上昇し、再度意識も明瞭となられたのですが、腎不全のため1992年11月14日昼すぎ不帰の客となりました。

思えば私が増淵先生のところにお世話になったのは1978年4月からでした。約15年近く増淵先生のすぐ傍らで、先生という偉大な目標に向かって勉強させていただいたのは本当に私にとってこのうえない幸福なことでした。増淵先生は直接手をとって指導するというタイプの先生ではなく、実際に OP の直接の指導や、研究活動、論文作成といった直接の指導は、いまは亡き増淵 junior 先生や久保先生が当たってくださいました。増淵先生からは大きな意味で医者としての生き方をもお教えいただきました。

後日、増淵夫人から、先生が倒れられた前日（10日）は、Dr. Wied 先生と夜おそくまで会食をされ、お別れもいつてきたから思い残すことはないといっておられたことをおききました。11日当日も午前中の外来診療で10数人の患者を診られ、私も Beschreiben に付かせていただきましたが、診察中の立ったり坐ったりはさすがにつらそうでした。しかし人前では絶対に弱音をはかれず、その態度には鬼気せまるものが感じられました。その日の夕方玄関に上るのに奥様の手をかりて上られたとのこと、正に最後の最後まで全力を出しきったという生

き方を示されました。あまりにも偉大な先生のすぐ近くにいと凡人の私には先生の偉さがときとしてみえなくなり、いつも私ばかり叱られるのはなぜ?などと思ったりしたこともありましたが、叱ってくれる人のいなくなったいま、先生との最後のお約束を果たせなかった残念さとあいまって、何ともいえない空虚感がいまだにぬぐ

えません。天国からまた「バカめ」とお叱りを受けそうです。増淵先生が最後まで身をもって私たちに示くださった、医者として、人間としての生き方のお手本に少しでも近づけるよう今後とも努力を続けることをお誓いし、そして先生のご冥福をお祈りいたします。

合 掌



増淵一正先生とわが青春の癌研病院

佐賀医科大学産婦人科
福田 耕 一

初めて先生にお目にかかったのは、1978年の春、福岡市において日産婦総会があり、途中、佐賀にある岳父（植田健治、指導医）の家にお立ち寄りになったときと記憶している。以来、14年近くにわたり、公私ともに不肖の門下生としてお世話になることとなった。当時、婚約中だった私は、岳父より是非会わせたい先生がいるとの連絡を受け、出張先の病院から佐賀に出掛け先生にご挨拶したわけである。その当時、増淵先生の名前も、癌研の名前も知らなかった田舎者の私が最初にお会いした先生の印象は、ハンサムで上品な先生であった（偉い先生とは存じ上げず、心貧しき者は幸いなり）。先生と親交のあった岳父との縁で、1979年の春より癌研病院婦人科にお世話になることとなった。音楽好きであった私は、東京でクラシックの演奏会を楽しむことを考え、ほんの1、2年の軽い気持で東京に出掛けたわけで、以後7年間、癌研でお世話になるとは夢にも考えていなかった。上京前、田舎の温泉街の病院で安逸な日々を送っていた私にとって、癌研での日常のハードスケジュールは強烈であった。毎朝、先生は早目に病院におでになって、癌患者の治療内容などを自分用のカルテに記載され、必ず9時には回診、または手術がスタートした。そして、毎週2回午後から癌患者の追跡診、この繰り返しであった。それは決して無機的に陥ることなく、確実に、しかも無駄なく行われていた。当時、医局での朝一番乗りはご子息の故増淵誠夫先生で、何時も机にむかい勉強されていた。そのかわり、仕事を離れるのも早く、夕

方早々に皆いなくなっていた。ぐずと遅刻は当時の医局では罪悪であった。能力ではかなわないがせめて朝一番に医局に乗り込もうと思い、毎朝6時起床の生活が始まり、現在も習慣となっている。早い仕事の開始、時間を大切にす、仕事とプライベートを切り離すなど、癌研婦人科で学んだことは決して少なくない。また、先生は音楽、絵画など、いろいろな事柄に精通されていたが、それはペダントティックなものとは相いれない教養というものをついつも感じさせた。先生からN響の定期の席をお譲り頂き、しばらくNHKホールにも通ったことがある。以前、NHKのFM放送に出演され、バックハウスの弾くベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番について対談なされたことがあり、興味深い内容であった。そういう意味で先生は医学の恩師であると同時に人生の恩師でもあった。先生と私では頭の中味は随分と違うが、僭越な表現で恐縮だが不思議と相性がよかった（ちなみに先生とは三回り違いの子年である）。仕事上、叱られた記憶がない。もっとも、できの悪い息子ほど可愛いという言葉もあるが、いつだったか、私におっしゃられたことがある。医者には三種類ある。それは大医、中医、そして小医で、小医は病気を治し、中医は人を治し、大医は国を治すと。私もせめて中医ぐらいにはと常日頃思っている。外国で三度ほど、ご一緒する機会があった。最初が1982年、米国シアトルで開催された国際癌学会で発表の機会があり、発表前日ホテルのお部屋で発表原稿をなおして頂いたこと、会場でGusberg博士に紹介して

頂いたこと、また同じ年、初めて訪れた秋のウィーンでの Tutorial でハイリゲンシュタットを夕方散策し、ペーターヴェンハウスを見学した後、ホイリゲ（居酒屋）に入り、先生は葡萄ジュースで私の新酒にお付き合い頂いたこと、Wied 教授のご招待で国立歌劇場にご一緒したこと。そして最後は1988年、先生のご配慮によるシカゴ大留学中、やはりウィーンでの Tutorial でご一緒できたことなど、たくさんの楽しい思い出を先生から頂戴した。研究面でもいろいろとご配慮頂いた。最初はヘルペス・ウイルスと頸癌の関係の仕事で東大医科研の吉野亀三郎先生のもとへ数回足を運んだ。次に、頸部腺癌の速中性子線治療のテーマを頂き、故久保久光先生としばしば文部省、厚生省による班会議に出席させて頂いた。最終的には、東海大病理の渡辺慶一、長村義之両教授の下で免疫細胞組織化学の仕事を受け、当時の共同研究者である秦宏樹先生（現、北里大）、それから佐竹公一技師には大変お世話になった。これらの仕事を学位論文として母校である長崎大の山辺徹教授にお世話頂いた。また、昨年6月、当教室の杉森甫教授を会長として第33回日本臨床細胞学会総会が博多で開催された際、

私が幹事を仰せつかり、先生に対するご恩返し的一端として自分なりに努力させて頂いたが、体調思わしくなく福岡の方へはおみえ頂けなかったのが心残りである。最後にゴルフの話になるが、私が癌研に行きすぐ医局コンペが計画され、ゴルフを始めたわけだが、コンペとは別に先生とは何度もご一緒させて頂いている。とにかくプレイが早かった。ボールの傍に行かれたかと思うと、すぐにクラブが振られていた。陽光溢れる伊豆の川奈ホテルでの優勝が良い思い出となった。昨年春、癌研創立記念日に霞ヶ関カントリークラブで増淵杯が行われたが、ゴルフ場でご一緒するのもこれが最後と思い九州から飛んで行った。もう霞ヶ関でやることもないと考えると淋しい限りである。以上、癌研時代を通じて今日にいたるまで先生に対する敬愛の念は変わっていない。先生の生涯の仕事場となった癌研、そしてわが青春の病院となった癌研で先生にお目にかかれた幸福に今さらながら感謝している。ちなみに私の指導医番号は527番で、かの有名なモーツァルトの歌劇“ドン・ジョヴァンニ”のケッヘル番号と同じで、地獄堕ちを避けるため日々鋭意努力している。

増淵一正先生を偲ぶ



相互生物医学研究所 (BML)
病理・細胞診センター

田 中 昇

癌研築地時代から一傍系の中の直系の恩師増淵先生

恩師の一人増淵先生を失ったことは私個人としても誠に残念である。日本人で病理レジデントの草分けとして私の直系の恩師太田邦夫先生(前日本医学会会長)が1953年米国 Sloan kettering Memorial Cancer Institute に留学されることになったとき、私は太田先生の留守のお手伝いとして望月孝規先生とともに、戦災で焼失した大塚の癌研の代りとして銀座築地の南胃腸病院を全面に癌研が借用し、仮住としていたとき、屋上にプレハブで研究所が仮設され、その中に病理部があった。増淵先生の婦人科は向い側のボクシングホールを改装した病院の中にあった。天神先生、鈴木先生などもおられた。私の実弟

が太田先生の直系の弟子として病理部で病院病理の仕事をしていた。当時から病院と病理部との連携はきわめて緊密で、今でこそ病院病理部の活躍は当然の認識になっているが、当時としては現在の病院病理部以上のレベルであった。増淵先生主導のもと細胞診もきわめて活発に実施されていた。私どもの研究室の隣に平田守男前技師長、前細胞検査士会会長が細胞診の仕事をしていた。当時、田崎院長が内科学会の宿題報告「血中の癌細胞」についての細胞診的な仕事が平田氏の手で進められていた。太田先生がそれを review されていた。末梢血、門脈血などの buffy coat が対象で、しばしば異様な巨細胞が検出された。私は元来造血臓器系の病理をテーマと

して勉強していた。これが細胞診への導入の糸口になったが、太田先生からしばしばこれらの標本をみせて頂いた。大部分が magakaryocyte (肺胞壁毛細血管にひっかかっているものがしばしば見出される) に該当するものと思っていたが、門脈血中からは癌細胞と思われる細胞も検出されていた。

癌病院はほかの施設からの紹介患者が大半で、患者は厳封された標本と報告書持参で来院。

私どもは太田先生、増淵先生の指導のもとに当時から、CIS、早期子宮頸癌について豊富な貴重な資料に基づいて系統的に教育をうけており、かつ類表皮化 epidermidization の種々相、今でいう dysplasia についての知見、鑑別、follow-up date などの教えをうけていた。患者持参の標本の中に dysplasia のいかに多くが癌と診断されているかを知った。その頃 CIS なる概念もまだ広く理解されておらず、多くの病理学の大家が epidermidization, CIS をみせてくれとの来訪をうけ、“なるほど” といって帰って行かれた。最先端の貴重な資料は本当に増淵先生一派によって集積されていたのである。このような増淵先生との個人的なご指導を頂きながら、京橋公会堂での細胞診研究会に参加させて頂き、臨床細胞学の旗上げにも顔を出させて頂いた。

CT (JSC), CT (IAC), MIAC, FIAC など

申すまでもなく増淵先生は本学会の創始者でもあり、また、International Academy of Cytology (IAC) 創設者のお一人でもあり、本学会の会長が福田 保先生であったが、増淵先生は常任理事として実質的には臨床細胞学会の最高責任者として主導的な立場で運営、推進されておられた。昭和40年当時、母性保護医協会が「女性を人工妊娠中絶の害から守ろう」というプロジェクトから、「女性を子宮癌から守ろう」という campaign の変更、展開にあたり、細胞診による集団検診導入に伴って当時の協会の森山会長が臨床病理学会の実質的会長小西井望先生に必要な数の精度の高い細胞診スクリーニング技師の早急な養成についての要請があった。当時、臨床細胞学会には技師関連の制度はなく、技師に関してはもっぱら臨床病理学会が最も関連の深い学会であった。さらに細胞検査士資格認定試験のプロジェクトについても委嘱されてスタートしたいきさつなどは本会報の前号に書いた。その過程で私は頻りに増淵先生を訪れ相談に乗って頂き、結論的には専門学会である日本臨床細胞学会と日本臨床病理学会との共催で実施することになり、両学会からそれぞれ専門の権威あるメンバーが選ばれ準備

段階から実施に致った。細胞学会側は今にして思えば実に動きの早い、かつ小廻りのきく運営で、しかも世界的視野での適切な増淵先生の指導、決断、決裁でただちに実施に移すことができた。良い悪いは別として大変スムーズにプロジェクトを進めることができ、昭和41年に養成システムが、昭和43年に細胞検査士資格認定試験が開始された。さらに日本より2年遅れて昭和44年に IAC が CT (IAC) の制度を発足されることになったが、本学会の制度、方法がかなり参考にされ、基本的には同じようなシステムで出発した。資格更新制度も4年ごととされた。その中にはスペイン語圏などは国際的な言葉としてスペイン語で受験できることになっており、Dr. Meisels が翻訳を担当していたようであった。早速、増淵先生と相計り、日本からも多数の応募受験により多数の合格者 CT (IAC) を出して、世界的に日本の臨床細胞学のレベルの高さを認識してもらうべく日本語での受験を可能にするように増淵先生のお伴で交渉し、IAC の Dr. Wied をはじめ、Dr. Keebler など関係者は全く異存なく、日本語で受験できるようになった。今では受験要項にも明記されている。CT (IAC) の資格更新 criteria の基準を日本の実情に transfer する交渉も増淵先生がパイプになって交渉、合意に達し、日本側にまかせるということでスタートし、現在に到っている。Fellow (FIAC) になるための Cytopathologist Exam. についても全く同様の過程でシステム化され、2年ごとに日本で CT (IAC), Cytopath. Exam. が同日に実施されている。ところで Cytopath. Exam. の受験資格は3年以上 MIAC である必要があるが、当時日本では MIAC が少く、日本から多数の FIAC が生れてほしいとの願いから、当座、指導医で MIAC に推薦されれば受験が可能で、合格して3年経てば自動的に FIAC になれるとの合意がとりつけられて初年度はスタートした。これ皆増淵先生をリーダーとする交渉結果であり、増淵先生の IAC における権威と信用は絶大なものであったことを側近にいて痛感した。

さて「試験問題」の和訳について増淵先生から指示をうけ、極秘裏に少数の権威ある先生にお願いし、訳の一元化、外国でしかみられない病気、知見などの日本語化、本部への問合せなど実務の責任者として担当した。英語の設問には実に違和感を感じた。私も1957~8年の間、AMAのお膝元のシカゴに留学中、第1回の ECFMG 試験を受けさせられた。合格しないと送還だとおどかされた。当時は朝鮮動乱で医者は軍医として徴庸され、医

者不足、一方欧州動乱でポーランドなどから多数の難民が避難してきていた。その中にいい年をした医師がかなりいて、その人達を医者として仕事ができるようにとのことで ECFMG 制度ができ、合格したこれらの人達がインターンとして苦勞していた。米国では若いときから fast reading の訓練が行われ、学生は一晩で一冊読んでこいと命令され、翌日質問されるという教育が行われていた。ECFMG の問題も長い長い文章記述（症例の記述など）に対する設問が次から次へと討論形式で展開して行く形式であり、その後、いつの間にか choice 形式の問題になった。CT (IAC), Cytopathologist Exam. も御多分に洩れず同じ形式であるが、設問が日本の感覚でいえば「ひねくれ」しており、最後に except …などが入っており、熟考しないと手がつけられない問題がしばしばで、読めば素直に頭に入る問題表現にかえることに苦勞した。CT (JSC) の CT (IAC) 合格率は 95~97% (一時期 80% 代)、Cytopathologist Exam. は 100% と誠に見事である。それもそのはず、CT (IAC) Exam. は先行した日本のやりかたが modify されたような形式なのだから。この間にあって増淵先生を中心とした日本側の実務者の骨折りと米国側の Dr. Wied, Dr. Keebler, Mrs. Woodworth (Dr. Patten 夫人) などの最大級の好意ある対応によるものである。

和訳について筆記試験、コダクローム・テスト、鏡検テスト、すべての設問の和訳は大変な苦勞であった。お働き頂いた先生方のお名前は極秘のため明すことはできないが本当に感謝である。実務担当が変わったためか、本年 1993 年度の Cytopathologist Exam. 説明会のとき、今年は日本語では受験できず、原文での受験である旨の説明があったと一部の受験の先生から電話があった。早速、実務担当機関である細胞診断学協会天神理事長に相談したところ、ただちにもと通り日本語で受験できることになり、当初増淵先生、私どもが IAC 本部に合意をとりつけた原点に立ちかえることができた。説明会のときに日本語が良くないという批判があったそうだが、原文が平行して印刷されているので、そのほうが良ければ日本語にならないような違和感の強い原文で受験して頂ければ結構である。元来、医者でも最高レベルにある指導医の先生方に訳文で受験して頂くことは失礼だとの発想で当

初から原文を併記した次第である。CT (IAC) Exam. は訳文だけである。

このような関係で増淵先生と頻繁にお目にかかる機会があり、お伴をして交渉のため渡米の飛行機の中で隣りの席で長時間ご一緒させて頂く機会があり、きわめて個人的ないろいろの話を伺った。先生のクラシックレコードの貴重なコレクションのこと、日本では入手できない原盤をずい分お持ちのこと、特注のオーディオ・システムのことなど一通りのマニアではないことを存じ上げていた。3 年前、NHK FM でいろいろな方からの推薦レコードを放送しているのをときどき聞いているが、偶然、増淵先生推薦レコードというのを耳にし air check した。初めのほうが入ってなくモノラルであるかと断っていた。確かバックハウスのベーターベンピアノコンチェルト 2 番であったかと思う。

生を完成された増淵先生の死

大変気丈な先生は反面大変やさしく、よく人の面倒をみておられた。ご自分の心の痛みに触れられたくないお気持ちが強く、ご子息を逝くされた際のショックで、お慰めの言葉に「いわないでくれ」と心を閉ざされた。今回の病に際しても胸部腫瘤の穿刺吸引細胞標本をご自身でもご覧になり、肝癌の転移であると納得されておられた。お見舞いに対しても「いわないでくれ」と堅く心を閉ざされ、いべき言葉もありませんでした。最後の最後まで、化学療法中の身であるにもかかわらず、毎日廻診し、診療と指導を欠かさなかった、と伺っていた。私は養成所の講義のあとは必ず部屋をお訪ねし、ご挨拶のあとかなり長時間雑談で過したが、それ以後は部屋をお訪ねするのに大変躊躇した。逝くなられる少し前、昼を少し過ぎた時間、私は養成所の講義を終わっての帰路、ご帰宅の先生と走り去らんとするハイヤーと癌研のゲートのところでばったり合い、お互いに手を振ってお別れしたときの先生の笑顔が最後のお別れになった。忘れられない。天に召され、神の国でご子息とともに平安のうちに過しになっておられるごようすが目に浮ぶ、心よりご冥福をお祈りし、本当に公私ともにお世話になり、特に CT 養成、CT (JSC) 制度、CT (IAC)、FIAC のシステムについて故久保先生などとともにお手伝いさせて頂いた思い出を記して亡き先生を偲ぶ追憶文とします。

恩師 増淵一正先生の思い出



植田産婦人科医院
植田 健治

恩師 増淵一正先生との最初の出会いは、私が昭和34年5月より佐賀県立病院好生館産婦人科に勤務し、臨床の時間をさいて松井敬介先生（元九大病理助教授、当時鳥取大病理教授、現在福岡市で開業、三善病院長）のご指導で、マウスによるベンツピレンの子宮頸癌の発癌実験を行い、熊本の日産婦総会（当時、熊大教授、加来道隆先生が会長として主催）で発表し、幸い示説発表だったお蔭で立ち止まられた増淵先生（当時、東京癌研婦人科部長）から「君、いいことをしているね」と話しかけられたことに始まります。

その頃、当時の長崎大教授、三谷 靖先生に「コルボスコープは何がいいでしょうか」とお尋ねしたら、「増淵君がよく知っているから聞いてごらん」といわれ、ご相談したら、「ZEISS」がいいとのご返事を頂き、それ以来、自分で解決できないことがあると、いつも増淵先生にご相談したことを昨日のように思い出します。ご返事はいつも即刻、正確でした。

今から振り返って考えてみても、一つとして曖昧なことではなく的確でした。私にとっては BIBLE でした。その頃から、広汎手術を何としても上手になりたいと思い、手術の見学をお願いし、時間をみつけては上京しました。まだ大塚の病院ができる前で、麻酔は腰椎麻酔だけでしたが、1時間半もあればゆっくり終了していました。みるもの聞くもの、皆びっくりすることばかりで、先生の手術には無駄や間違いがないので、出血は少ないし、時間も短いのだと判りました。五年生存率も最高です。手をとって教えて頂く機会には恵まれませんでしたので、ただ黙って盗むだけでした。見学するたびに、自分でも少しうまくなったことが感じられました。

その後、医学のことだけでなく、音楽（クラシック、

オペラ）や絵画、また文学など芸術の話でも何でも先生との間には、いつも豊富な話題が上りました。先生との会話が一番楽しい時間でした。

昨年夏、病が次第に重くなったある日、ご自宅から近くの佐伯祐三公園まで散歩に出かけ、木陰のベンチで半時間位、彼のフランス滞在中のことなどいろいろ聞かせて頂いたことが、先生とゆっくり散歩できた最後でした。

私はビールが好きですが、先生はお飲みになりません。しかし、先生との食事のときは、いつも二人でまずビールで乾杯しました。先生はちょっと口をつけただけで、私のグラスに入れて頂くのが常でした。これは、病が重くなってもほとんど変わりませんでした。

先生は、常日頃、癌で回復の見込みのない患者を早くから入院させるのは良くないことで、働けなくなってから入院させるべきだといっておられました。先生ご自身、そのように実行されました。

細胞診のことで忘れ得ないことが一つあります。私が開業して2年位過ぎた昭和49年頃、頸管スミアですごく大きい核をもったものがあり、あれこれ調べても判らず、丸3日間ほとんど眠れない夜が続きました。きっと今まで経験したことのない悪性度の高い癌に違いないと興奮が続きました。たまたま、先生が運よくそのとき佐賀へこられましたので、鏡検して頂くと、ヘルペス感染細胞でした。後で知りましたが、その頃は癌研でも鈴木忠雄先生が1～2例発表されていたぐらいで、ヘルペスが演題に上る最初の頃で、私も当時、九大 滝 一郎教授が主催の日本臨床細胞学会で発表することができたことを懐かしく回想します。

増淵先生の死は、私から何もかも奪い去って行きます。淋しい限りです。先生のご冥福を心からお祈り致します。

増淵先生を懐う

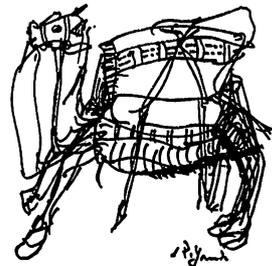
エスアールエル細胞病理研究所

高橋正宜

Papanicolaou 分類のクラス4とクラス5の定義に熱い討論をしていた細胞学会発足の頃には、私など青二歳の若造としか映らなかったに違いない。先生が昭和30年代にすでに世界の著名な細胞学者と親交を厚くされて活躍中の頃、マイアミの Papanicolaou 研究所を訪れられ、マイアミ大学 Hopman 副教授（主任 Anderson 病理学教授）に会われて、日本から高橋某なるものが細胞診を研修したことを知られた由、後日うかがったのが先生との出会いということになる。それ以後に先生にまずいところをみつかったのがパリ国際細胞学会議の帰りのことであつた。私は野田 定君とスイス旅行を楽しんでいたときのことである。ジュネーヴのコルナパン駅構内で懐もさびしく野田君とホットドッグで昼食とあいなつたとき、ぼったりと増淵先生にみつかったのである。私どもは先生に連れられ急に足どりも軽くレマン湖の畔で由緒ある5つ星“Beau-Rivage”ホテルで昼食をご馳走になったことは忘れ得ない。それが先生の後日談義の話題提供となったことは申すまでもない。

私の英文出版“Color Atlas of Cancer Cytology”の第8回日本翻訳文化賞授賞の式で先生のお祝詞を頂いた感激は忘れ得ない。先生もそれをことのほか喜んで下さり、1981年の第2版の序文に祝詞を読んだ時以来細胞診の10年間の進歩が如実にしるされていることを強調して下さった。またウィーン大学前の本屋の店頭で初版の本が並べられていたことと、店主との会話を序文の冒頭に述べて下さり、それを読むたびに先生との会話が昨日のごとく思い出される。

私が岐阜から東京に戻り現職に着いたとき、一緒に仕事をしようと声をかけていただき、癌遺伝子の勉強ができたことを深く感謝致します。私自身にも力の衰えることを痛感している昨今ですが、たとえ改訂ができたとしてももはや序文を頂戴できないことを深く悲しみます。個人的な先生との結びつきに終始したことをお詫び申し上げるとともに先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。





増淵一正先生の思い出

獨協医科大学名誉教授
信田重光

増淵先生に初めてお目にかかったのは昭和35年の夏頃であったと思う。当時私は順天堂大福田外科に在籍し、東京医歯大病理 山田 喬先生とともに東京細胞診研究会を作り、2～3回お茶の木の飲み屋の二階で津田一彦先生（当時御徒町で内科開業、胃細胞診の草分けの第一人）にご馳走になりながら東大分院外科、慈大狛江病院内科、千葉医大外科の諸先生方と小さなプロジェクターでスライドをうつしながら discussion をしていた。そのうちに、婦人科細胞診研究会を増淵先生と水野潤二先生とで作られるということで、恐らく当時の私の師匠福田保先生の所へ連絡でもあったのであろう、「増淵先生に会ってきたら」というお話で、山田先生と一緒に大塚の癌研病院に増淵先生をお訪ねしたのがお目にかかった初めてであったと思う。そのとき、先生は早速天神先生、藤井先生を呼ばれてわれわれを引き合わせて下さり、先生方は婦人科細胞診研究会のことを、われわれは東京細胞診研究会のことを説明し合い、学術集会としては婦人科細胞診研究会に合同しようという結論になった。

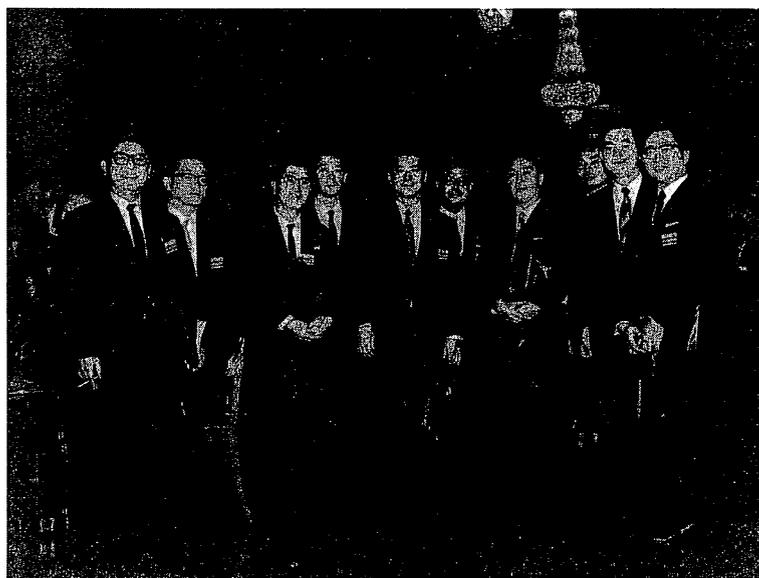
そのような関係で、第1回婦人科細胞診研究会が昭和35年京都 都ホテルで、第2回研究会が昭和36年大阪日生中ノ島研修所で開催されたとき、それぞれ東京細胞診研究会の名を冠して発表した。山田先生、澤田勤也先生もご一緒であった。

そのようなことで研究会や学会ではいつも増淵先生にご挨拶申し上げ、婦人科細胞診研究会が臨床細胞学会となつてからは福田教授が理事になられ、私が評議員であったが福田教授のカバン持ち的な立場でよく理事会に陪席させていただいた。当時石川正臣先生が会長で、増淵先生、水野先生が常任理事でいらっしやうと思う。石川先生は福田先生の東大病理教室での先輩でいらっしやうだったが、増淵先生は両先生方を立てながら会を運営されていかれるのに感心もし、またわれながら有難く思ったものである。

そのころ、増淵先生は Prof. Wied, Prof. Meisels, Prof. von Haam, Prof. Reagan, Prof. Koss らと International Academy of Cytology の設立に参画され、第1回の International Congress がウィーンで1962年（昭和37年）に開かれたとき、水野先生が行かれてそのご報告を学会でされた。第2回が1965年（昭和40年）にパリで行われるので、増淵先生から「行かないか」とのおさそいをいただいたので、「Fiberscope を用いた直視下細胞診による早期胃癌の診断」の演題を出して参加した。このときの日本人参加はたしか12名で、増淵先生、水野先生をはじめ、渡辺義男教授、藤井純一、野田 定、高橋正宜、石東義男諸先生および順大外科から私、沢田好明、滝田照二君と益川（在アメリカ）、坂井（在スイス）、山田（在ロンドン）の諸先生もそれぞれ参加しておられ、日本人の発表は6題であったと思う。

学会終了後、増淵先生にパリで最もステーキの美味しいといわれるレストランで水野先生とともにご馳走になったが、偉い先生の間にはさまって生きた心地もなく、もともとツングェンオンチの小生、そのときの味を覚えていない。このとき増淵先生は水野先生とご一緒に official banquet（ベルサイユ宮殿）にご出席のためにタキシードを新調されたとのこと、パリで上等な靴を安くまげさせて喜んでおられたことを思い出す。またこのとき増淵先生方がどのような旅程をとられたか私は知らず、私は沢田、滝田両君とともにヨーロッパ、アメリカをまわって40日間の旅行をした。

3年後の1968年（昭和43年）第3回国際細胞学会がブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれることになり、増淵先生から福田先生と私におさそいがあった。旅行の日程を増淵先生がアレンジされ、サンフランシスコ、ニューヨーク、リオ・デ・ジャネイロ、ブエノス・アイレス、サンチャゴ、リマ、メキシコ、アカプルコ、ロスアンゼルス、ハワイと21日間の旅程を立てられた。前半に村上忠重教授（当時私の主任教授）、綿貫教授（千葉大



第3回国際細胞学会（リオ・デ・ジャネイロ）。左より5番目増淵先生（昭和43年5月）



第7回国際細胞学会（モントリオール）で（昭和58年5月）



CT IAC 試験のとき、Prof. Wied と並ばれて（東京）（平成3年5月11日）

外科），奥井勝二先生，ニューヨークからは榎木勇先生，リオで藤森教授（当時群大外科），佐分利六郎先生（同愛記念病院外科）方が合同されて，リオでは総勢20数名のグループになった。団長の増淵先生はさすがにお顔が広く，福田先生をはじめ私のごときチンピラも外国の偉い先生に紹介して下さった。リオのあとのブエノス・アイレス，サンチャゴ，リマ，メキシコはいずれも増淵先生の知り合いの先生方のおられる大学を見学することができ，大変勉強になった。最後までご一緒であったのは増淵団長，水野副団長，福田先生，沼津の印牧先生，私と教室の荒川君などであり楽しい旅行であった。

このあと第4回国際細胞学会がロンドンで1971年（昭和46年）に開かれ，このときも増淵先生が旅程をアレンジされて，ロンドンのあと，スペイン，アフリカ・ウガンダ，ケニア，インド・ボンベイをまわるようになった。

福田先生も前回の南米の旅行が楽しかったので「増淵さんがアレンジされるのだから今度も楽しいでしょう」とおっしゃって全行程をご一緒することになった。この旅行中のエピソードとして，マドリッドの闘牛場で猛り狂った闘牛が観客席に飛び込んだこと，ケニアのナイロビで増淵先生が福田先生を世界選手権大会が開かれる有名なゴルフ場に案内されたとき，増淵先生がマネージャーに話をされて福田先生のグリーンフィーが無料になったことなどは拙著「旅の思い出」（近代文芸社）に詳しく記した。

このあと昭和47年のウィーンでの第2回 International Tutorial に増淵先生のお伴をして出かけ，48年増淵先生が会長での Tokyo Tutorial と続く。

1984年（昭和49年）マイアミでの第5回国際細胞学会の際は，福田先生（当時82歳）は肝硬変で腹水がたまっ

ておられたが、これが最後だからと出席され、その際増淵先生が航空会社に話をされて、福田先生は first class の席で寝てくることができ、楽であったと喜んでおられた。当時羽田からロス乗りかえでマイアミまでは20時間近くかかったであろう。マイアミでも増淵先生は福田先生を IAC のボスに紹介して下さい、皆さんも82歳で腹水の貯まっている身体で学会に出席されたということで大変喜んでおられた。メインホールの最前席で増淵先生と並んで講演をきいておられ、ときどき福田先生に話しかけられるのをすぐ後の席で拝見していて、福田先生をいたわって下さる増淵先生のことを全く有難く思ったものである。福田先生はご帰国後、杏林大学学長室で執務中に吐血され、手術を受けられたが7月11日逝去された。

このあとが1977年(昭和52年)増淵先生ご主催の第6回国際学会 Tokyo Congress になる。総計1,400名(うち外人550名)の参加者を得て、Tokyo Congress の盛会の模様は現在でも IAC Congress の中でも最高と語りぐさになっている。

その後1980年(昭和55年)第7回ミュンヘン、1983年(昭和58年)第8回モンリオールと増淵先生のお伴をして学会に出させていただいた。モンリオールでは先生のご推挙により Goldblatt 賞を頂戴した。

1986年(昭和61年)第9回ブラッセルの学会が増淵先生が出席された IAC Congress としては最後であろう。次の1989年(平成2年)ブエノス・アイレス、1992年(平成4年)第11回メルボルンの学会にはおみえにならなかった。しかし1988年(昭和63年)秋のウィーンの第15回 International Tutorial のときは「日本から大勢きてほしいとって来たから」と増淵先生からお誘いがあり、また IAC の理事会も開かれるというので、増淵先生には癌研の山内一弘先生が付き添われてロンドンまわりで、私はスウェーデンの Dr. Stormby の所に寄ってウィーンに入った。増淵先生はお疲れのごようすもなく、いつものようにお元気でいらしゃった。このときはドクターは増淵先生をはじめ、青木 智(浜松聖隷病院)、島村香也子(栃木がんセンター)山内先生に私、また癌研佐野、札幌清野君をはじめ技師君が7名で計12名

が参加した。Tutorial 最後の夜、ケルトナー通りをちょっと入ったところの日本料理屋で全員が増淵先生にご馳走に相成ったが、このときが増淵先生の最後のヨーロッパ旅行であったかも知れない。

International Tutorial は日本では1983年(昭和58年)栗原操壽先生ご主催で第11回を、第1回 International Tutorial on Aspiration Cytology(昭和60年)を私の主催で、また第17回を東京で開催したが、いずれのときも増淵先生はお手空きのときは会場にみえられ、Prof. Patten や Prof. Wied を始め Prof. Meisels, Koss, Bibbo, など IAC のボスの先生方と談笑され、また懇親会のときはお挨拶をいただいたりした。

メルボルン学会の際は前日の IAC 理事会で増淵先生のご指示と根まわしのお蔭で、1998年の学会を理事会全員一致で東京に持ってくる事ができた。

昨年1992年(平成4年)11月10日、CTIAC および IAC Cytopathologist 試験に来日した Prof. Wied を囲んで、東京医大病院で増淵先生、早田先生、加藤教授以下教室のスタッフと私とで1998年の Tokyo Congress の打ち合せを行った。その後早田名誉教授が増淵先生をはじめ皆さんを夕食に招かれたが、私は所用のため失礼した。増淵先生はその夜大変お元気で食欲も旺盛でいらっしゃり、料理をおいしいといわれて全部平らげられたという。その翌日宝塚での細胞学会にでたが、委員会の席上で先生が倒れられて、癌研病院に入院されたという知らせを山内先生から聞いた。その後一時持ち直したという話して安心したが、その後14日に帰宅して先生が逝去されたという話を伺った。翌日お宅にお伺いしてご遺体にお焼香申し上げたが、普段と変わらないお顔つきでおられた。

初めて先生にお目にかかって三十数年、特に IAC 関係では多大のご指導をいただいた。今日の私は先生のお蔭ででき上がったという思いがする。各地の国際学会でお話し下さったときのご温貌が目蓋を去らない。日本の、そして世界の細胞学会を育てあげられた増淵先生でいらしゃった。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げる次第である。

合 掌

増淵一正先生を想う

日本細胞病理ラボラトリー

石 東 嘉 男

二、三ヵ月前に編集者の方から、故増淵先生について、何か書けというお話があったときには、正直なところいささかの戸惑いのような気持ちがあったことは事実であります。といいますのは、たとえば私なら、恩師である故沢崎千秋日大名誉教授の追悼文は東大、京都府立医大より日大にかけての先生のご活躍や私個人の受けた薫陶や数々の恩義、その他諸々のことが昨日のこのように眼前に彷彿として、心のこもった一文をものすことができました。

それに対して、増淵先生の場合には、私は弟子でもなく、したがって学問的あるいは技術的に特に直々お教えを受けたわけでもなく、またその立場にもなく、さらに身近に接したわけでもないので、私の増淵像というものはどこまでも、間接的であり、またフィルターを通したようなもので、はなはだ不分明、不正確であってこのような追悼文をものするには私は不適當な人間ではないかと感じたからであります。

ただそれでも敢て原稿締切ぎりぎりになって書こうかと思うようになったのは昭和36年以来、婦人科細胞診談話会の時代より先生が亡くなるまでの約30有余年にわたり、日本臨床細胞学会の場を通じて、節目節目にはお目にかかり、また、私が昭和60年に秋期大会を主宰したときには何かと有益なアドバイスをいただき形にあらわれないものではありませんでしたが、いろいろとお世話になっていながら何も書かないのはいささか礼を失するのではないかという気がしてきたからであります。

もし間違っていたらお許しいただきたいのですが、私の増淵像というのは私自身のあやふやな印象に加うるに、故久保博士ら癌研の先生方、あるいは故沢崎先生を通したものですが、きわめてドライというか、現実的というか、あるいはゴーイングマイウエイというか、機をみるに敏というか悪くいえば自己中心的、良くいえば自らに忠実で他人が何といおうと自己の信念を貫くという強い意志の持ち主の方というものでした。むしろ先生は医者にしておくのは惜しいような方で政治家にでもなっておられたら、さらに一層有名になっておられたのではないかと思惟している次第であります。先生は確かにきわめて優れた資質の持ち主であったことは疑いもなく、学会運営などはいかに及ばず、臨床的にも患者病歴の整理や手術の技術などは他の追随を許さないものがあつたと漏れ承っております。ただ惜しいかな、前述のような先生のご性格はたとえば私のような凡庸でウェットな人間からするといささか近寄りたがたい存在であり、その点は私の恩師の沢崎先生のように清濁併せ呑んで多くの弟子を育ててこられた方とはちょうど対極に位置する存在であったと思います。歴史上の人物に対比すると、先生はどちらかというとう秀吉や家康ではなくて、信長型の人物ではなかったかと思っております。

最後に大変華麗な人生を全うされた先生にある意味での羨望と見事なまでのプラグマティズムを貫かれたその生きざまに心より贅辞を送って追悼にならないような追悼文とさせていただきます。 合 掌





増淵先生との邂逅

千葉県立衛生短期大学
澤田勤也

癌研病院婦人科外来，診察室から白衣姿で廊下にてきた増淵一正部長は，この方らしい英国紳士風のゆったりとも静かな口調で心配と不安の中，緊張して待っていた私に告げて下さった。

「奥さんの下腹部の腫瘤は卵巣のう腫であろう。腫瘤の一部分にときに組織学的に悪性所見をみることがあるので，手術を受けるのが望ましい選択である。でも君の給料では，癌研での入院，手術はむずかしいから，君の勤務先の玉川病院ではできないかね」というご宣託であった。1964年，初秋のある日のエピソードであった。増淵部長の説明は終始，微笑をたたえつつ簡潔にして明瞭であった。

先生は，1949年，東大産婦人科教室から癌研にご赴任されたときいていたので，多分，当時すでに癌研在職十数年近くになっておられたであろう。婦人癌の早期診断という大志を抱いて，子宮頸癌の細胞診断学の研究をされていた偉大な学者の風格と慈父のごとき温容に接し，患者から信頼される医師とはこのような方をいうのだと痛感しつつ，妻とともに癌研をあとに帰路についた。

妻の手術は，私が当時勤務していた東京世田谷の日産玉川病院で受けることになり，東大をご退官になられ，赤坂の山王病院におられた安井修平先生にお願いすることとなった。安井先生は，私の師匠である河合直次先生と東大が同級生で，しかもベルリン留学をともにされたということのをのちに河合先生からきかされた。手術は，1964年10月，東京オリンピックのとき，しかも手術とマラソン競技が同一日，同一時間であったことを記憶している。手術は，30分程で終了し，最終的な組織診断は，多房性のう胞性卵巣腫瘍であった。

その後，2，3年経て，私は河合先生のご命令を受けて愛知県がんセンターに赴任し，福岡誠吾先生（第25回日本臨床細胞学会総会会長）から，肺癌外科の指導を受けることとなった。この間，年2回の臨床細胞学会で

は，毎回のように，学会会場内で増淵先生にご挨拶する機会があった，というよりは，こちらからすすんで，近況など報告申し上げていた。すると，いつも決ったようにおっしゃられたことは，機会があったら東京に帰ってきて細胞診の研究を続けるよということであった。先生のお言葉が何を意味しているのか，当時よく理解できなかったが，今思うに，東京は指導者も多く，若い多くの研究者の中で環境も恵まれているので東京の方が勉強ができるのではということであったのであろう。

このことが通じたのか，1982年12月，よき時代によき指導者のもと3年半の快適な愛知県がんセンターの勤務に別れを告げ，千葉に帰り，千葉県がんセンターの建設・準備を手伝い，以後，ひきつづいて肺癌の勉強をすることとなった。それから約20年，千葉という細胞診断学の仕事には至極，恵まれた環境の中で臨床細胞学会の活動や研究を続けることができた。増淵先生とは，相変わらず学会会場でお会いするとともにそれ以上に評議員会，理事会あるいは懇親パーティーでたびたびおめにかかるようになり，以前にも増して近親感を深めていった。また，国際細胞学会では，ご自身，学会での役職，運営に多忙な中を会場内で親しく声をかけて下さるなど少なからず勇気づけられたことが忘れられない。先生は，1977年5月には，東京で第6回国際細胞学会の会長をおつとめになられたが，会場となったホテルニューオータニでの設営，進行，学会レセプションなど空前絶後の壮大，豪華な学会となり，当時のかずかずの情景が今もって鮮明に脳裏に焼き付き，忘れられない学会となった。まさに増淵先生のもっておられる本量が存分に発揮された学会であった。その後，ミュヘン，ブラッセル，プエノス・アイレスなどと続き，私たちが年々国際交流を深める好機となっているが，東京コンgresほどのことはかつてなく，増淵先生の国際舞台での偉大な足跡のひとつとなった。私が東京での国際細胞検査士試験の日本側の委員長を抑せつかったある年など，未熟な私に気

づかってたびたび、あたたかいご指示やご指導をいただき私につきそうごとく、なにかにゆきとどいた先生の心づかいは今でも忘れられない。

増淵先生が、不幸、肝臓におかされ、癌研病院に入院されたとの報は、ある友人からきかされていた。その後、動脈塞栓術、治療などによりかなり回復され、ときに外来診療もされるようになったときいて、なかば安堵し

たり、責任感の強い先生のこと無理を押されているのではと心配したり、一喜一憂、心の揺れを抑えることもできず日々過していたが、1992年11月14日、永眠。11月15日、上野、寛永寺で別離のとき、先生の静寂な温顔に、今日の臨床細胞学を育てられ、築かれた全身全霊に合掌しつつ別離となった。



増淵一正先生を偲ぶ

国立栃木病院産婦人科
長谷川 壽彦

増淵先生の日本臨床細胞学会で残された軌跡は学会の歴史そのものであり、今日の学会があるのも先生の卓越した指導力に負うところが多い。個人的にはシカゴ大学留学の際には Prof. Wied への紹介状を頂いたこと、マイアミでの国際細胞学会と学会後のカナダ旅行にご一緒させて頂いたことや盛岡の臨床細胞学会で教育講演座長の労をお取り頂いたことなどさまざまお世話になったことが強い印象とともに思い出されます。先生に接することで、個人的に学ばせて頂いたことを述べ追悼の一文と致します。

マイアミでの国際細胞学会のときでしたが、外人さんと（先生はそのときは“毛唐と”とおっしゃいました）付き合うときの心得としてそれとなくお話になられたことで、現在でも私のモットーとしていることがあります。正確な言葉は記憶しておりませんが、内容は「日本人なのだから日本人としての誇りと文化を持って外国人に接するのは当然であるが、文化の違い、言語の違いなどなど単純には埋められない溝が外国人に接する場合にはあるので、日本人の尺度だけで外国と外国人をみてはいけない」でした。外人にとって当たり前のことが日本人の気になることがよくあります。反対に日本人にとってなぜこんなことが外人には理解できないのか訝しく思うことがあります。そのようなときには先生の言葉を

思い出して行動しています。私などは真の国際人であった先生とは比べものになりませんが、少なくとも私なりの外人さんと接するときの教訓だけはお教え頂いたと感謝しております。

シカゴ大学に滞在中 Prof. Wied の、先生に寄せる利害得失を越えた絶対的信頼、「増淵のいうことなら」ですべてが済んでしまうことに驚きました。勿類の友、水魚の交わりといわれますが、まさに先生と Prof. Wied の関係はそれにあたり、人が人を信頼することとはこういうことなのかをまのあたりにした思いでした。一方でこのような信頼関係ができるためには、人間としての魅力、依頼されたことへの誠実な取り組み、また相手の立場を理解しての依頼が絶対の条件にもなります。この信頼関係ができたのは先生のすべてに真摯に取り組まれる態度と人格のなせる結果と思いました。振返って自分をみれば、これほどまでの信頼を寄せ得る人があるのか自信がありません。信頼関係とはこのように在るべきとの見本をお示し頂いたのですが、凡人の悲しさ到底先生の足元にも及ばないことを悲しんでおります。

先生への最大のご供養は、先生が作り育てた日本臨床細胞学会を発展させることと思います。そのために微力であっても学会のため役立つようなことをやらせて頂くのがせめてもの恩返しと思っています。

合 掌

1992年度第2回指導医会議事録

日 時：1992年11月12日（木）

場 所：兵庫県 宝塚ホテル 宝寿の間

出席者：645名

司 会：信田 重光 指導医会会長

議題に先立ち、第32回総会議事録（案）が教
ヵ所訂正され承認された。

議 題

A. 報告事項

1. 庶務報告 (加藤治文 庶務担当幹事)
会 員 数：7,960名（医師3,849名 技師4,042名
図書69件）
指導医数：1,170名
FIAC：83名 MIAC：90名（含、申請中）
CT(IAC)：2,800名 CT(JSC)：3,931名

2. 1992年度指導医資格更新業務について
(杉下 匡 指導医資格更新担当幹事)
1992年度（平成4年）資格更新該当者は、昭和63年
度資格取得した指導医番号 No. 774～899の指導医
である。
資格更新申請書は、11月中旬に事務局より発送さ
れ、申請締め切りは、12月10日とする。
前回の指導医会で検討されてきた、指導医資格更新
に必要な単位修得の救済方法として作られた

- ・細胞診研修会単位取得申請書 } の書式が決定し
- ・単位認定書 } た。

1993年より実施されるので、地域の細胞診に係る勉
強会、講習会、研修会を開催する時は、予め届出を
すれば更新時に加算されるので、事務局へ申し出を
する。

3. 1992年度指導医試験日程について
(桜井幹己 指導医試験実施委員長)
試験実施日：平成4年11月28日（土）
場 所：江坂研修会館（大阪）
受 験 者 数：107名が予定（総合科33名、婦人科49
名、呼吸器科20名、消化器科5名）

4. 1992年度細胞検査士試験日程について
(垣花昌彦 細胞検査士試験運営委員)
第25回細胞検査士資格認定試験

第一次試験：平成4年11月8日（日）

東京・大阪・福岡にて実施した。
受験申し込み数874名中、欠席9名。
実数865名が受験し、546名が合格し
た（一次試験合格率63.1%）。

第二次試験：平成4年12月12日（土）、13日（日）
日本都市センター（東京）にて実施予
定である。

5. Cytopathologist 資格認定試験について
(桜井幹己 試験実施委員長)
日 時：平成5年3月21日（日）
場 所：日本都市センター
受験資格：MIAC になって、3年以上の経験が必
要である。
該当者には、後日資料を送付する。
(日臨細胞誌31巻5号公示)

6. 国際細胞検査士資格認定試験について
(長谷川寿彦 試験実施委員長)
日 時：平成5年3月21日（日）
場 所：日本都市センター
受験資格：平成4年度（25回）細胞検査士資格認定
試験までの合格者。
受験申込方法：平成3年度（24回）、平成4年度（25
回）の細胞検査士資格
認定試験合格者には事務局より連絡をする
が、それ以外の受験希望者は事務局へ登録
用紙をハガキにて請求のこと。
(日臨細胞誌31巻5号公示)

7. その他
 - 1) 細胞診指導医資格認定試験の試験分野変更につい
て
(桜井幹己 細胞診指導医試験実施委員長)
平成5年度試験より、今までの4科目から3科目
へ施行する。
3分野（総合科、婦人科系、内科・外科系）とな
る。
 - 2) 指導医会報 No. 8 が発刊され、会場にて配布さ
れた。

今号より、指導医会議事録が掲載されることになった。

3) 渉外委員会より

日本学術会議研連、日本病理学会、日本臨床細胞学会との合同シンポジウム案内

(杉下 匡 渉外委員長)

日 時：平成4年11月30日

場 所：日本学術会議講堂

参加費：無料

シンポジスト：坂本穆彦、松崎 理、矢谷隆一、
栗田宗次、牛込新一郎。多数の方が参加してほしい。

B. 協議事項

1. 細胞検査士資格更新審査委員会報告並びに提案事項について

(柴田偉雄 細胞検査士資格更新担当幹事)

1) 1991年度(平成3年度)資格更新保留者のその後の取扱いについて

保留者 6名

3名：海外在住。帰国後に保留期間を除く基本単位を満たしたので更新を認めた。

1名：単位を満たしたので更新可とする。

1名：検査士カード紛失の為、参加した証拠書類を事務局へ提出して点数が満たされれば更新を認める。

1名：単位不足の為、更新不可。資格喪失となる。

2) 1992年度(平成4年度)細胞検査士資格更新について

更新該当者：828名

更新締切日：12月15日

更新手続き締切日を厳守していただくよう、指導医の先生方に指導をお願いしたい。

3) 資格喪失者の救済について

単位不足の為、更新ができなくて資格喪失した人の復活について、一次試験を免除したらどうかとの意見が出ていたが、安易に認めるのは試験を甘くみる原因ともなるので喪失者は、一次試験から再度挑戦してもらうことになった。

4) 更新保留対象者について

イ 海外在住の場合は、帰国後保留期間を満たす。

ロ 出産・育児の場合は、出産年度とその翌年の育児期間(計2年)を保留期間とみなす。

ハ 長期療養の場合は、療養期間に係わる主治医の診断書を提出して保留期間を認める。

以上が提案され承認された。

2. あり方委員会報告並びに提案事項について

(杉下 匡 あり方委員長)

細胞診指導医と細胞検査士の比率は1:3とする。陰性標本の取扱いについては、必ず指導医は捺印、署名を行いその責任を明確に負う。これは原則として理念であり実情では不都合な面も生じてきている。しかしながら、何とかその方向にもっていかうという願いから、検査士側の意見を聞こうということで、7月29日に指導医側、検査士側の代表が集まり非公式談話会を開催して下記の問題が提案された。

1) 指導医と検査士の比率(1:3)の原則をどのようにして行うかということに関しては、支部単位で考えて支部長にお願いし各支部状況と照し合わせながら少しずつ問題を解決していく。この件につき検討すべき問題があれば、あり方委員会へ申し出てほしい。

2) 1人の指導医が大勢の検査士を指導している場合でも、新しい検査士や新指導医が出てきた時は、なるべく紹介して均等を保っていく。また、専門外の指導医はお互いに連携プレーをとりながら指導していく方向に進めていったらどうか。

3) 訴訟問題や特別な問題が発生した場合には、指導医会会長が適任者を指名しその問題を解決する為のワーキンググループを結成して、問題処理にあたる。

以上の意見が提案された。

4) 指導医会幹事の定年制とその後の処遇について前指導医会で、幹事の定年制(満65歳)と顧問の設置は承認されているが、指導医会規約の条文改定については、委員会へ一任されていたのであり方委員会で検討の結果、下記の通り細胞診指導医会規約を改定することが承認された。

細胞診指導医会規約

第4章 第7条 幹事は指導医会会員互選により選出される。

幹事の任期は3年とし、再選を妨げない。

(追加) 但し、選出時、被選出者は、満65歳を越えないこととする。

指導医会会長は、満65歳以上の幹事経験者の内、指導医会に特に功績のあったも

のに対し顧問の称号を与えることができない。

顧問は、指導医会、指導医幹事会へ出席できるものとする。

(平成4年11月12日より施行する)

5) 諸制度審議委員会より、指導医としての業務範囲が細胞学会と、指導医会の双方に渡って区別が判明していないので、明確化した方がよいのではないかと指摘があったので、今後の検討課題としていく。

6) 指導医たる者は、単に検査士を指導するだけでなく、人格的に尊敬されるような態度を示す必要がある。

1種目の専門分野に甘んじているのではなく、他種目にも挑戦して検査士に対する指導力と自信を身につけてほしい、との意見が出された。

3. その他

1) 医療法改正に伴う検査の諸問題

(天神美夫 日本細胞診断学協会理事長)

平成4年7月1日から新しい改正医療法が実施された。

(内容)

①理念の問題。医師の他に新しく看護婦、薬剤師が医療を担うものとする。

②具体的には、特定機能病院の諸問題がある。

③療養型病床群という新しい言葉が生まれ、それに対する新基準が決まった。

これに対しては、厚生省の中の医療審議会が6月下旬～10月上旬に開催され、文章で通達される予定である(正式には、12月末の官報告示)。

この中で細胞学会に関与する点は、検体検査の外注に伴う問題である。

外注委託には、(i) 院外委託の他に、(ii) 院内外注が新しく加わった。院内外注は、検体委託に伴う検討委員会で作業を行っているが結論はまだ出ていない。

コマーシャルラボの導入については、450医療機関の内71機関において導入されているが、現在は院長命令がコマーシャルラボには及ばない仕組みになっているので、この度の医療法改定では院長の権限がある組織関に改定する。

院内外注の施設(検査所)に対しては、立入調査を行い丸適マークが平成5年3月位までには発行され

ることになる。

2) ㈱医療関連サービス振興会のマニュアル作成について

① 現在は㈱日本臨床検査所協会だけが検査所に対して、適切に行われていれば丸適マークを発行している。

㈱医療関連サービス振興会の丸適マークが初回のみ一致する。3年毎に書き替え業務を行うと一本化するだろうから都道府県の実態が把握できると思う。

② コマーシャルラボで検体数が多く、他のコマーシャルラボへ再委託した場合もその検査所の丸適マークが必要となってくる。

3) 指導医会に対する要望事項

① 大腸、肺気管等は、保険診断料では一臓器として取り扱われているため、子宮頸部、体部の病理診断・細胞診断も1ヵ所の検体としてみられているが、離臓器として取り扱うよう話し合われてはどうかとの意見あり。

これに対し、北尾 学社保委員長より、厚生省側も子宮頸部、体部の細胞診は離臓器として取り扱ってほしい考え方のようだとの説明があった。できるだけ検査を2回に分けて採取してもらえば、保険点数の方も上がってくると思う。

② 指導医会開催日について

指導医数が1100名を越え、土、日の開催は会場確保に困難である。また、総会・秋期大会時併合の現在と切り離して、独自の指導医会開催は財政的に今は無理であり、大会会長の好意にお願いしてしばらくは現状のままで行いたい。

③ 指導医資格更新条件(4年間の内、指導医会への出席3回以上)について

開業医の指導医は、3回以上の出席が難しいので緩和してほしいとの意見あり。

4年間(8回)の内、3回以上出席という条件は、決して厳しい要求ではないのだが、諸事情を聞きながら考えていく。

④ 細胞診の陰性標本の取り扱い、および報告書が、医師の行う診断書かどうかについて

将来、細胞診の報告書が細胞検査士単独の解答にならないように指導医の責任において、細目にチェックし権限を犯さないために、責任と自覚を持ってほしい。

⑤ 日本医師会加盟について

細胞学会の加盟実現には、常置委員会を設けて数年に渡って、大変な努力をしてきているがなかなか難しい。努力が足りないのではないかとの意見があるが、今後も細胞学会全力を上げて努力して

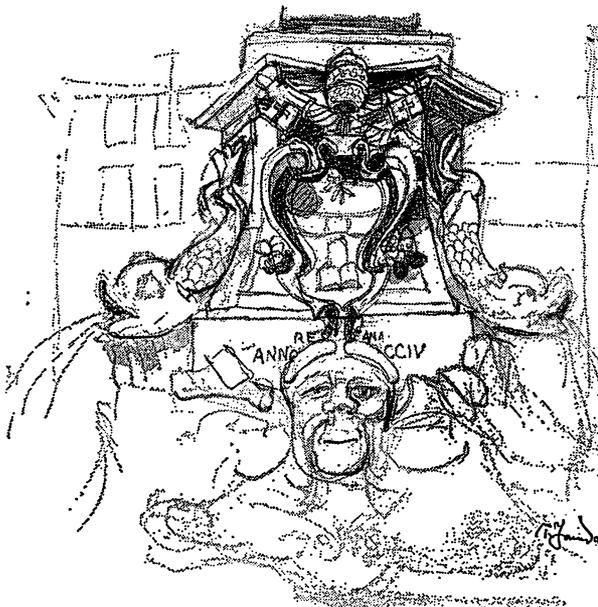
いくつもりである。

C. 学術講演会

演 題：北海道の指導医の現状について

演 者：坂井英一（国立療養所道北病院内科）

司 会：山田 喬（指導医会学術担当幹事）



編 集 後 記

指導医会名簿をひもといても、増淵一正先生の名はみられない。物故された方の名は抹消されるというので、1968年の第一回の名簿を探してみても見当たらないに違いない。そのはずである。そもその始まりから、増淵先生は指導医ではなかったのである。日本臨床細胞学会の生みの親の一人である方がなんで指導医ではないのかと思われるに違いない。しかし、実際は指導医にはならなかったのである。

ここまで読まれた方の中には、指導医でもない人の追悼特集号を指導医会報がなぜに企画したか、疑問に思われるむきがおられるかもしれない。しかし、これにははっきりとした理由があるのである。

1968年(昭和43年)、日本臨床細胞学会誌7巻1号に、増淵先生はこう書かれている。「1968年6月15日、総会前日に行われた理事会および評議員会の重要議題として、細胞診指導医認定をめぐる活発に検討された。その結果、会則を変更して別掲のごとく、指導医に関する規定が設けられた」と。これが指導医制度の始まりである。実はその理事会の終わった直後、大会の始まるのを待っていた私をロビーで掴まえて、「いま決まったのだが、いよいよ君達の時代がくるよ」といわれた。「これからは君達実際に仕事をしている人に働いてもらわなければいけない。そういう制度が理事会で通ったよ。私たち年寄りはその育てるよ」と目を輝かされたのを覚えている。理事会での議論については何も知らないが、常任理事として学会の運営に当たっておられた先生が指導医制度の生みの親であったことは間違いない。また、初めから学会の運営とか事務的なことは細胞診の現役を離れた古手が、細胞診断学の実地は、現実に細胞診の仕事をしている若手が指導医として引っ張って行くという構図を描かれておられたことがうかがえる。つまり、先生は指導医制度は作られたが、ご自分は指導医にはおなりにならなかったのである。

先生が亡くなられたとき学会誌に追悼の辞は掲載されたが、指導医会報でも追悼の意を表すべきと編集委員会が考えたのは、指導医制度の成立にこのような経緯があったからである。企画が決まり、委員の心当たりで諸方に執筆のご依頼をし原稿を頂いた。そしてできあがったのがこの追悼号である。執筆者(執筆順、敬称略):天神美夫、滝 一郎、岡島弘幸、藤本郁野、福田耕一、田中 昇、植田健治、高橋正宜、信田重光、石東嘉男、澤田勤也、長谷川壽彦

ただ心配と心残りは、他に執筆頂きたい方、執筆なさりたい方がもれてしまったであろうことである。時間と紙面の制約にしばられていることに免じてお許し頂きたい。

この会報の中ですべての方が述べられているように、増淵先生を語ることは日本臨床細胞学会の歴史の一つの断面を表すことである。また、先生は最後まで学会の発展、ひいてはわが国の臨床細胞学の発展を願い、氣遣っておられた。残されたわれわれが、日本臨床細胞学会、指導医制度をさらに発展させることが先生のご冥福につながることになろう。

合 掌

指導医会報の発行が始まって5年、本号で10号になりました。山田 喬編集委員長を頭に5名が初代の編集委員として編集に携わってきました。このたびの幹事の改選を機に全員交替します。私どもの編集方針は、学会、指導医会の隠れた歴史の一面を記録しておくこと、会員各位の細胞診に対する情熱や努力を掘りだし、会員相互の連携を深めることでした。ユニークなレイアウトとカットとともに、ある程度は目的を達したものと自負しております。しかし、多少、視野が狭かったことはいなめず、会員の皆様には不満があったかも知れません。第一期の産物には往々あることとしてお許しを乞い、新編集委員には、さらに良い編集方針を立てて、本誌を発展させて頂くことをお願いして最後の編集後記と致します。

(編集委員 垣花昌彦)

会報編集委員会

委員長: 山田 喬

委員: 藤井 雅彦, 垣花 昌彦, 野澤 志朗, 上井 良夫